

「ぶり」という言葉

このたび 能村登四郎の句集「芒種」を読んでいて

加賀ぶりも年々薄れ雑煮膳

杉の間に伊賀ぶりといふ幟立つ

という二句に遭遇した。そこで鮮やかに思い出したのが
嘗て鎌倉で行った「濱」の吟行会の講評の席上でのこと。

その時 林火師は自作

春の鳶鎌倉ぶりに大きな輪

鼓の音梅も鎌倉ぶりにかな

に触れ この句は 波郷の 〆武蔵ぶり〴〵に触発され出来たもの。

〆鎌倉ぶり〴〵はこの場における私の言葉 真似する勿れといったニユ

アンスのことをおっしゃった。あとから 雑詠で似たような句を

弟子共が作るのを封じたように聞こえた。

そんなことより 私が感心したのは 俳人 林火は言葉というものに

こんな真摯な思いを抱き続けているのかということ。

そんなことを 登四郎の句をみていて思い出した。

因みに 俳句検索データベースで 「ぶり」なる言葉で検索してみると

下記のごとくであった。地名に「ぶり」なる言葉を被せた句の用例。

「ぶり」の一般的な用例は 秋櫻子の句に見られるように

〆みちのくぶり〴〵 あたりであろう。

登四郎の 〆加賀ぶり〴〵 〆伊賀ぶり〴〵はみごとに波郷の 〆武蔵ぶり〴〵

林火の 〆鎌倉ぶり〴〵 〆会津ぶり〴〵に应酬している。

【大野林火】

夜咄やにしん田楽会津ぶり

方円集 昭和五十三年

春の鳶鎌倉ぶりに大きな輪

月魄集 昭和五十四年

鼓の音梅も鎌倉ぶりにかな

月魄集 昭和五十四年

【石田波郷】

名月や門の櫂も武蔵ぶり

松籟の武蔵ぶりかな実朝忌

【能村登四郎】

雪吊の加賀ぶりと思ふ縄の張り
鬼胡桃育てて甲斐の男国ぶり
加賀ぶりも年々薄れ雑煮膳
杉の間に伊賀ぶりと云ふ幟立つ

【水原秋櫻子】

卯の花やみちのくぶりの大鎧
暑をしのぐみちのくぶりの駄菓子もて

殉教
蘆雁